

2015年9月5日

経済セミナー2015年11,12月号

「オークションとマーケットデザイン」第17回

即席！全体主義をデザインする¹

松島 齊

東京大学経済学研究科教授

ツェッペリン広場にて

私は、ドイツのニュルンベルク郊外にあるツェッペリン広場で、この原稿を書き始めている。ここはかつて、アドルフ・ヒトラーがナチの党大会をおこなっていた場所だ。当時のドイツ国民のヒトラーに対する異常な熱狂ぶりは、レリーフェンシュタール監督の記録映画「意志の勝利」を見ればいやというほど思い知らされるはず。そして、この映画の中で絶叫していたヒトラーの演説台は、今私の目前にある。

(写真1)

ヒトラー政権は、ニュルンベルク法という究極の人種差別法を制定して、ユダヤ人を大量虐殺に追い込んでいった。そして、多くのドイツ国民が、こんな悪魔的国家政策に、積極的に加担していたのである。なぜこのようなことが起こったのか？どんな条件がそろえば、これからもおこりうるのか？

今回は、現代においても未だタブー視されるヒトラーに代表される、「全体主義」について考察したい。

¹ 今回は Matsushima (2013)にもとづく。Matsushima (2008a, 2008b)も関連する。

全体主義とは、個々人が、自律的に判断する自由を失って、政策当局や権威者といった「地位の高い」人の意図に、無思慮に従っている社会を意味する。全体主義をメカニズムデザインに関連付けて説明しようというわけだから、今回のテーマは重い。

私は、父親の影響で、幼いころからベートーベンやワーグナーといったドイツ音楽に親しんできた。特に、フルトヴェングラーという指揮者が私の大のお気に入りだった。

しかし、フルトヴェングラーが活躍したのは、第二次世界大戦中、ヒトラー政権下のドイツだ。しかも、ワーグナーとフルトヴェングラーはヒトラーの大のお気に入りだったそうだから、これでは私とまるで同じじゃあないか。

ヒトラーというとんでもない悪魔と同じ趣味をもっている以上、邪悪な企みに協力するような大人になっていくんじゃないだろうか。普段あまり素行のよろしくなかった幼い私は、こんな不安を内心感じていた。

アイヒマンとアーレント

その後だいぶ経って、ユダヤ人を次々に死の収容所に送り込んでいた実行犯が逮捕されたのが、丁度私が生まれた 1960 年であることを知った。更に時を経て、この実行犯の名前はアイヒマンといい、イスラエルで裁判を受けて処刑されたと知った。

ついには、ハンナ・アーレントという女性哲学者が、アイヒマンの裁判について、「イスラエルのアイヒマン」という本を出版して、大いに評判になったことを知るにいたった²。

はたしてアイヒマンとはどのような人物だったのか。その残虐な行為から察するに、ヒトラーと同じくらい悪魔の動機をもった人物に間違いない。

ところがアーレントは、裁判の様子を見て、アイヒマンはどこにでもいるごく平凡な小役人風の人物だと分析したのだ。邪悪な動機や企みなど、もともと

² Arendt (1963).

と持ち合わせていなかったというわけだ。では、なにがアイヒマンをこんな大量虐殺に駆り立てたのだろうか。

アイヒマンは、最初はヒトラーの政策に懐疑的だった。しかし、ユダヤ人大量虐殺を決議した「ヴァンゼー会議」に出席した際、地位の上の人がそれを強く支持していたこと、参加者全員が競って賛同していたことを目の当たりにした。これを契機に豹変して、自分でものごとを判断するのをやめ、上司の意図を常に忠実に実行するという態度を決めこんだ、というわけだ。

従順と同調

ヴァンゼー会議を契機に、従順（Obedience）と同調（Conformity）という、二つの感情が、アイヒマンの行動を支配するようになった。従順とは、上司の意図に忠実にふるまいたいとする感情を指す。同調とは、周りの人が上司に従順であればあるほど、自分も従順でありたいとする感情を指す。

従順と同調以外の感情、例えば、上司の意図することは人道的に問題があるのでそれには従いたくない、とか、嫌いな上司なのでむしろ邪魔したい、とかいった、別の感情はことごとく抑制されて、一切彼の行動に影響を与えなくなった。

このような心理状態は、ずいぶん特殊に感じられるかもしれない。しかし、もしアイヒマンがヴァンゼー会議で経験したのと同じようなプロセスを、人為的にも作り出せるとしたならば、我々は、いつでも、どのような問題に対しても、アイヒマンのような心理状態を再現できるはずだ。

実際、ミルグラムやジンバルドといった心理学者は、「アイヒマン・テスト」、「スタンフォード監獄実験」と呼ばれる心理学の実験をおこなって、多くの被験者が権力者の非人道的な意図に忠実にふるまおうとする状況を作り出して見せたのだ³。実験主催者は、被験者の心理状態をコントロールできてしまう。個人の自律的自由をうばって、全体主義を実験室に再現できてしまう。

³ Milgram (1974), Zimbardo et al (1977).

どうやら、邪悪な動機とは別に、従順と同調もまた、全体主義を理解するに欠かせない重要なキーワードらしい。従順や同調といった感情は、社会的決定のプロセスによって、様々に引き起こされる。だから、これらの感情にともなう生じる心理的コスト（心理的負担）は、経済的配分から得られる利己的便益に還元して考えることはできない。そのため、この連載では今まで一度も、このような心理的コストを考慮してこなかった。

メカニズムと感情

ならば今回は、メカニズムデザインに、従順や同調といった感情を組み入れることを検討してみよう。メカニズムデザインのアプローチを、自律的自由が失われている全体主義にも応用できるならば、はたしてどのような議論が成立するのだろうか？これを考えてみよう。

メカニズムデザインと全体主義との関係が分かってくれば、ナチスによる大量虐殺のような大問題に限らず、現代のハラスメントのような、もっと日常的な問題についても、秘密裏に「プチ」全体主義が成立していて、「プチ」邪悪な意図が履行されていることを暴けるかもしれない。

今までの連載では、経済主体はもっぱら、配分から得られる利己的便益の向上を追及する存在であることが前提された。今回もこの前提をなるべく踏襲したい。そのため、政策当局がプレイヤーの感情をコントロールできるとしても、利己的便益に比べれば、それは微々たる心理的コストの差でしかないものと仮定しよう。

しかし、従順や同調がもたらすわずかな心理的コストの差を有効利用できるならば、プレイヤーから、政策当局の意図に忠実な行動を引き出せるかもしれない。このことを探ろう。

メカニズムとプロセス

その前に、今までの連載で検討してきたメカニズムについて、確認しておきたいことがある。それは、メカニズムは、暗黙に、政策当局とプレーヤーの間の契約関係であるとみなされていることである。もしメカニズムにしたがって配分がなされなければ、政策当局とプレーヤーのどちらかは、第三者、つまり裁判所に訴えることができる。とりわけ、金銭の授受がメカニズム通りになされていないならば、その場合の被害者は訴えを起こすに違いない。

この時、メカニズムの内容の詳細をも公にされることになるだろう。もし政策当局が邪悪な意図にもとづいてメカニズムをデザインしていたのなら、それは白日の下にさらされよう。場合によっては、政策当局は社会的制裁を受けらるだろう。

だから、このような政策当局は、金銭の授受をとまなわずに、契約という形式をとらずに、情報収集する手段を、いろいろ考えないといけない。

このような政策当局の仕方は、メカニズムと区別して、今回では「プロセス（手続き）」と呼ぶことにしたい。これから、政策当局が、プロセスをうまくデザインすることによって、プレーヤーに正直に情報を表明させる具体的な方法を紹介したい。

貧困救済再考

前回と同じ問題を検討しよう。政策当局は、地域 A、B、C のうち、最も貧困な地域に経済援助したい。しかし、どの地域が最も貧困なのか知らない。そこで、これらの地域のことをよく知っている 3 人の調査員 1, 2, 3 に尋ねることにした。各調査員は、全地域の貧困の実態について把握している。最貧困地域は A である。しかし、各調査員は共通して、地域 B をえこひいきしている。この場合、はたして 3 人の調査員は正しいことを話してくれるのだろうか。

前回では、「アブルー・松島メカニズム」を使えば、全員に正直に答えさせることが可能になると説明された。「最初の嘘つき」にごく少額の罰金を支

払わせるようにすれば、各プレイヤーに、ドミノ倒しのように、虚偽表明から正直表明に切り替えさせることができる⁴。

しかし今回は、罰金なしでも正直にしゃべらせることが可能になることを説明するのである。それは、罰金の代わりに、従順と同調という新しい魔法を使って、3人の調査員を手なずける、というやり方だ。

プロセスデザイン

まず最初に、政策当局は、調査員 1, 2, 3 に対して、自分の意図することを、以下のように説明する。「あなたがたが今までに私に対して抱いてきた感情には左右されずに、どうぞご協力ください。私は、A、B、C のうちもつとも貧困な地域に経済援助したい。しかし私はそれがどこだか知らないので、是非教えてほしい。」

プロセスのこのような最初のステップは、アイヒマンにおけるヴァンゼー会議での経験に相当する。つまり、巧みな弁舌を駆使するなどして、このステップによって、各調査員は、政策当局に対する従順と同調の感情を、他の感情をおしのけて植えつけられると仮定するのである。

どの地域が援助されるかは、各調査員の利己的便益に、少なからざる影響を与える。この影響の程度に比べれば、従順と同調がもたらす心理的コストはごくわずかに過ぎないということも仮定しよう。

具体的には、どの地域が援助されるかは、各調査員にとって、100万円の範囲内で、利己的便益の差をもたらすとしよう。一方、従順と同調がもたらす心理的コストはせいぜい 100 円、ワンコイン程度としよう。ワンコイン程度の従順と同調があれば、政策当局は調査員を意のままにできることが、これから示される。

政策当局は、調査員 1, 2, 3 に対して、順番に「最も貧困なのはどの地域か？」と質問する。この時、各調査員がどのように回答したかをお互いに見せ

⁴ Abreu and Matsushima (1992).

ない、調査員同士はコミュニケーションできない、と仮定する。つまり、各調査員は互いに仕切られて、防音室のようなところで個別に質問されるのである。

質問が一巡したところで、今度は、政策当局は、全員が見える仕方でルーレットを回す。ルーレットは当たりをごく小さな確率 $\frac{1}{10000}$ で発生させる。当たりが出れば、3人の回答をもとに「多数決ルール」で援助地域が決定される。つまり、少なくとも2人がAといえはA、少なくとも2人がBといえはB、少なくとも2人がCといえはC、に決まる。3人バラバラの回答なら、3地域が等確率で選ばれる。

外れだった場合には、再度、調査員1、2、3の順に「最も貧困なのはどの地域か？」を質問する。一巡したところで、再びルーレットを回して、当たりが出れば、多数決ルールによって援助地域を決定する。一巡目の回答はもはや使われず、二巡目の、つまり直前の3人の回答をもとに、多数決されるのである。

外れがでたなら、三巡目の質問をまた繰り返す。以下同様、当たりが出るまで同じ質問を繰り返し続ける。

アブルー・松島メカニズムとの相違

このプロセスは、幾度も同じ質問をする点、どの回答が実際に利用されるかはランダムに決められる点、において、アブルー・松島メカニズムによく似ている。

しかし、双方には3つの相違点がある。まず、質問をひとりずつ聞いている点である。アブルー・松島メカニズムでは同時に質問している。次に、金銭の支払いがない点である。アブルー・松島メカニズムでは、最初に嘘をついた人が罰金を払う。そして、従順と同調の感情が導入される点である。

従順は、単に正直にAと回答したいと思う感情である。これからの説明では、従順が果たす役割は、実はずいぶん脇役である。極端に弱い従順の感情だけで事足りる。

自分以外がみな正直に A を回答すると予想されるならば、自分がどう回答しようとも、多数決によって正しく A が選ばれる。この場合には、あえて嘘はつかずに、正直に A と回答したい。こんな程度に従順の感情を導入してやれば十分である。

同調がもたらすドミノ倒し

では、プロセスにおける主役は何かというと、それは、同調という感情が果たす役割、これに尽きる。同調は、他の調査員が正直に回答しているなら私はより正直でありたい、言い換えれば、他の調査員のなかに既に嘘の回答をしている者がいるのなら私は嘘をついてもうしろめたさをあまり感じない、という心理である。嘘をつくことによる心理的コストは、他の人が既に嘘をついていたかどうかによって左右されるとするのである。

では、一巡目の先頭バッター、調査員 1 のインセンティブについて考察しよう。ここで嘘をつけば、他の調査員に先んじて政策当局に反抗したことになる。同調が意味することは、このような最初の嘘つきは、余計に心理的コストがかかる、ということである。

余計にかかる心理的コストを 100 円としよう。これはごく少額である。しかし、一巡目の回答は確率 $\frac{1}{10000}$ でしか採用されないので、一巡目の回答がもたらす利己的便益の期待値は 100 円以下に収まる。ならば、調査員 1 にとって、最初の嘘つきになるのを避ける方が必ず得、ということになる。

こうして、一巡目の 1 人目は必ず正直に回答することがわかった。では 2 人目、調査員 2 はどうだろうか。

自分の前に調査員 1 がどのように回答したかは、直接には観察できない。しかし、調査員 1 のインセンティブを合理的に考えれば、正直に回答していたことは明らかである。ならば、調査員 2 は、調査員 1 が正直に回答した、つまり自分より前にはだれも嘘をついていない、と予想するのが合理的である。

ならば、ここで嘘をつけば、自分が最初の嘘つきになってしまう。だから、調査員 1 と同様、正直に回答するにこしたことはない。こうして、一巡目の調査員 2 も正直に回答することになる。調査員 3 についても全く同様だ。

一巡目がおわって、プロセスは終了せずに、二巡目にはいるとしよう。ここでもまた、調査員 1、2、3 の順で「もっとも貧困な地域はどこか」が質問されるが、1 巡目と全く同じロジックによって、各調査員は 2 巡目でも正直に回答することになる。以下同様にして、3 巡目、4 巡目、プロセス終了まで、全員が正直に回答し続けるのが、唯一無二の均衡になることがわかる。

各調査員は、同調の感情のために、最初の嘘つきになることを嫌うのである。このことが、ドミノ倒しのように作用して、いつまでたってもだれも嘘をつかないという状況を生み出すのである。

こうして、政策当局は、望み通り、調査員から最貧困地域についての正しい情報を引き出すことに成功するのだ。

単なる従順だけでは、利己的便益を上回るほど強くない限り、こうはいくまい。しかし、同調がワンコイン分ありさえすれば、こんなにうまくいってしまう。

これからの説明で、みなさんは、同調がいかに罪深い感情であるかをお分かりいただくだらう。

バスボイコット事件

我々のプロセスにおいて、各調査員の回答は他の調査員には聞こえないとされている。もし聞こえるならば、調査員 1 は一巡目にして、あえて嘘をついて、調査員が共通にえこひいきしている地域 B が最も貧困だと、大声で叫ぶかもしれない。これが他の調査員の耳にはいれば、同調の呪縛はまたたくまに解かれ、みんなでごひいきの B にコーディネートしよう、という展開になるかもしれない。

みなさんは、1955年にアラバマ州モンゴメリーで起こった「バスボイコット事件」をご存じか。人種隔離政策にもとづいて、黒人は白人にバスの席を譲らなければいけない。しかし、黒人女性ローザ・パークスが、白人に譲らずに席にすわる権利を行使したため、逮捕された。このことが引き金となって、キング牧師らが、黒人に市営バス乗車のボイコットを呼びかける。すると、多くの市民がこれに賛同し、その後の全米公民権運動へと発展していった。

このように、勇気ある1人の最初の一步が、多くの人々の行動パターンを変えてしまうことがある。このような事態がおこることを排除したいため、調査員への質問は隔離しておこなわれ、調査員間のコミュニケーションを禁じているのである。

証拠を残さない履行

「アブルー・松島メカニズムとそっくりじゃないか?」。アブルー・松島メカニズムでは、最初の嘘つきは、罰金を支払わなければならない。今回のプロセスでは、最初の嘘つきは、同調に逆らうことの心理的コストを余計に負担しなければならない。この違いは、確かに、インセンティブの観点から見ればなんら本質的でなく、同じように作用している。

しかし、契約関係という観点からは、大きな違いがある。アブルー・松島メカニズムでは、契約の内容について第三者に立証できる詳しい証拠をそろえておかなければならない。しかし、今回のプロセスではその必要はない。

口頭で、口約束で、事を運ぶことができてしまう。あとに何も証拠をのこさなくてもヘッチャラだ。だから、どんな日常の問題解決にも簡単に利用できてしまう。それが、たとえ邪悪な魂胆にもとづくとしても、だ。

スパイを探せ

たとえば、政策当局の質問を、「地域 A、B、C のうち最貧困地域はどこか」という問いから、次のような問いに変更したって、我々の説明に何らかわりはない。「私のはずかしい秘密を知っているスパイが、地域 A、B、C のどこかに隠れている。私はその人物を捕まえたいが、どこにいるのかわからない。どうか教えてほしい。」

捕まえて、いったいどうするのかって？そんなことは調査員にとってはどうでもいい。何がおころうとも、所詮利己的便益が 100 万円以内におさまる程度の問題にすぎない。このことさえはっきりしていれば、調査員は正直に居場所を教えるし、このような聞き込みをしたことについて証拠も残さずにすむって寸法だ。

「いや、おれはこんないやな話に関わりたくない。もし関わることになったら、たとえ他の人の耳に届かなくても、居場所を正直に教えるようなことは断じてすまい。」

なるほど、あなたは、ここで説明してきた従順と同調という魔術には操られない、といたいわけだ。実は私も全く同感なのだ。こんなことは私にはありえない話だ。

しかし、ならば、政策当局は、そもそも最初から、あなたや私には頼んでこないだろう。アイヒマンのような、無批判で忠実な小役人風の人を、幾人か選んできて、そいつらに頼めばいいだけのことだ。

そんなやつら、そんなにいるのかって？残念なことに、私のよく知るところの、どこぞの組織でさえも、アイヒマンみたいな連中で、今あふれかえっているような。まあ、こまった次第だ。

聖カタリーナ教会にて

ツェッペリン広場を後に、ニュルンベルクの旧市街地にもどると、私は今度は真っ先に、ハンス・ザックス像のある広場へ向かった。ニュルンベルクは、ワグナーにとってゆかりの深い地であり、楽劇「ニュルンベルクのマイスタ

ージンガー（名歌手）」の舞台としても有名だ。ザックスは実在した詩人だが、このオペラの主人公でもある。

ザックス像が見つければ、そのすぐそばには聖カタリーナ教会があるはずだ。聖カタリーナ教会は、「ニュルンベルクのマイスタージンガー」の第一幕で、ヒーローのヴァルターがヒロインのエファと出会うシーンの舞台である。たしか、ザックスの家からペグニッツ川を渡ってすぐのはずだ。橋をわたるとすぐそれらしき門を見つけた。私は今回はじめてニュルンベルクを訪れたわけだが、昔からいろいろな媒体を通じて町並みを知っているから、地図なしでも自分の庭のように歩いてしまう。

ニュルンベルクは、第二次世界大戦中激しい爆撃を受けた。案の定、聖カタリーナ教会も、外壁は残っているものの、ぼろぼろの廃墟と化していて、人気すらなかった。私の中のマイスタージンガー達はみな大いに傷ついた。

しかし、虫の知らせによって、夜もう一度おとずれてみると、今度は勝手口が空いていて、変わった服装の人が出入りしている。私はパルジファルのように勇気を出して中に入ってみると、結構な人ばかりで、空爆で抜け落ちた天井の下には小さなステージが組まれていた。

私の周りに人がよってきて、ドイツ語でなにか言われるが、全くわからない。背広を着たインテリ風に「ハウマッチ？」と聞いても通じない。不法侵入はいやなので、とにかく下手にあるビールを購入すると、みな私からすうと引いていくので、義務を果たしたんだと思い、ならば一番前でステージを鑑賞するとした。「これは町の集会なのか？」

ステージには中世の衣装をきた音楽隊と子芝居の若者で、風変わりなキリストが登場する学芸会風の喜劇が、1時間半ほど続いた。ドイツ語が全くわからないのだけれども、そこには、私には間違いなく、ダフィット、マクダレーネ、エファ、そしてポークナーもいた。

子芝居が終わると、先ほどの背広が壇上にあがって、あまり歓迎されていないなさそうなスピーチを始めるが、なぜか時折、私を指さしてくる。どうやら私は教会内で唯一の異邦人らしい。だんだん胸騒ぎがしてきた。

スピーチがおわると、背広は私に近づいてきてなにやら嬉しそうに話しかけてくるが、ドイツ語なのでわからない。そのことがわかってか、背広が失望した表情をするので、まるで「おまえはこの芝居をみて何も感じなかったのか？」とでも言っているかのよう。気まずくなってきた。

かくして、私は、くっしゃくしゃの東京大学の名刺を背広に投げ渡すや一目散に退散し、そして、こう思った。「こまったな。今度はもっと知を得てからでないと、この地には戻りにくそうだ。」⁵

(写真2)

参考文献

- Abreu, D. and H. Matsushima (1992): “Virtual Implementation in Iteratively Undominated Strategies: Complete Information,” *Econometrica* 60, 993–1008.
- Arendt, H. (1968): *Eichmann in Jerusalem: A Report on the Banality of Evil*, New York: Viking. (ハンナ・アーレント「イエルサレムのアイヒマン—悪の陳腐さについての報告」大久保和郎訳、みすず書房、1994年)
- Matsushima, H. (2008a): “Role of Honesty in Full Implementation,” *Journal of Economic Theory* 127, 353–359.
- Matsushima, H. (2008b): “Behavioral Aspects of Implementation Theory,” *Economics Letters* 100, 161–164.
- Matsushima, H. (2013): “Process Manipulation in Unique Implementation,” *Social Choice and Welfare* 41, 883–893.
- Milgram, S. (1974): *Obedience to Authority: An Experimental View*. New York: Harper and Row.

⁵ このわかりにくいエピソードは一応「パルジファル」のパロディーのつもり。余談だが、今年のパイロイトの「ローエングリーン」は Alain Altinoglu で、私は全く知らなかった方が間違いなくスーパー・コンダクターである。どなたか是非日本にお呼びしてほしいものだ。

Zimbardo, P., C. Haney, W. Banks, and D. Jaffe (1982): “The Psychology of Imprisonment,” In J. C. Brigham & L. Wrightsman (Eds.), Contemporary issues in social psychology (4th ed., pp. 230–235). Monterey, CA: Brooks/Cole.

写真 1



ツェッペリン広場をのぞむ私のパソコン

写真 2



子芝居の前の聖カタリーナ教会